

## 植樹は森を救わない

山本 牧

(NPO 法人もりねっと北海道 理事、旭川市)

植樹が大はやりだ。二酸化炭素を吸収し、地球温暖化対策になる。緑を増やす森づくりはイメージがいいし、何より誰でも参加できて、「何万本植えました」と成果が数字にもビジュアル的にもはっきりする。

だが、ちょっと考えてみてほしい。植林は木材生産を目的とした林業の技術であり、広葉樹植栽もそれをそのまま適用する例が多い。野生動物や鳥、昆虫、草本類や土壌などの要素を含めた環境復元や生物多様性が十分配慮されているとは言えないのが実態だ。

舞台裏をみると、植樹地を造成するため、せっかく生えた天然の二次林や、時には若い造林地さえもが皆伐され、平らにならされることがある。植えた後に作業員が一本ずつやり直すことは普通だし、広葉樹の若木はシカのごちそうになることも多い。一本ずつ名札をつけたので、成長後の間伐ができない、と笑い話のようなことも起きている。

つまり、多くの植樹行事が単なるイベントや作業体験会になり、何トンの二酸化炭素を吸収する「はず」という机上の計算になってしまっている。

参加型の体験も大事だが、まずはその対象地を調べ、どんな環境復元、森づくりが適切かを見極める必要がある。こうした理解や目的を参加者と共有するほうが、得られるものは多いだろう。

もちろん、世界的には大陸乾燥地帯のように植林が必要な場所も多いし、皆伐後の再造林は大切だ。しかし、植林さえすれば森は大丈夫、というのは事実ではない。

手をつけない、という選択も含め、その空間をどんな環境に維持・復元するかという「ゾーニング」の見極めが最優先だ。そのうえで植林するにしても、その後の維持管理や森づくりの目標設定は不可欠だ。

NPOで「森の何でも相談」というプロジェクトを行っているが、相談内容は実に幅広い。「子供と遊べる森」「散歩して気持ちいい空間に」「牛を放牧できる山林」など、従来の林業技術では対処できない要望のほうが多い。

身近な森林は、手つかずがベストとは限らないし、植えればいいものでもない。高密度に植えられ、单调で不安定な環境になっている人工林は、むしろ「伐る」作業(間伐)が必要だ。「緑は大切」という漠然としたイメージから、もっとリアルな森林への理解と合意形成が進んでほしい。